

## 標識白鳥についての提言 玉 田 誠

My Proposal to Neck Banding of Swans: Makoto Tamada

その鳥自身にとっては、はた迷惑以外のなにものでもない標識作業、そのことを知りつつも敢えてそれを行なっている以上、標識鳥についてはよりキメ細かな観察を行なうことを提唱したい。

現在は、標識鳥がどこでリサイテングされたかということに重点がおかれているが、リサイト地における終認日と初認日をより絶対値に近付ける様、格段の努力をする必要がある。このことは未確認の利用湖沼川の探索と移動経路のより適確な設定に役立つ。

標識鳥の家族構成についてのチェックも重要である。標識鳥はペアを組めるか……何年経ってもペアを組めない鳥はいないか（1 C22はいつペアを組んだのか、成鳥の雌であった彼女はネックバンドの脱落以前からか？以後か？→今日では確める方法がない）ペアの相手は毎年同じかどうか、幼鳥の数は毎年同じか（鳥相の確認—1 C22は3年間同じ、幼鳥の数は79年期、80年期の幼鳥は5羽、81年期は1羽）（右足にメタルリングのみの他のペアは81年期の秋は5羽の幼鳥を伴っていたが、春再び涛沸湖に姿を見せたとき幼鳥は4羽になっていた。しかし2 C54の標識をつけた幼鳥が常にこの一家につきまっていた。一旦し家族の方は特にいじめはしなかったが何となくよそよそしかった。—この一家は小湊で越冬したのである）。

また、（1 C22は餌を散布すると自分の子供が首をのべると、むしろ子供にたべさせるが、他の成鳥や幼鳥は追い散らすというように、彼女らを我々が注意深く観察すればより多くの習性を知り得る筈である。

バンデングが如何に彼女達に苦痛を強いているか。どこで憩おうが、どちらへ飛ぼうがそれはハクチョウの勝手である。着標鳥に何らかの不都合を耐えてもらっている以上、われわれの方もより多くのものを得るべく格段の努力をしてもよい筈である。標識鳥の記号、番号は気象条件や使用機器にもよるが、その確認は300m位まであり（日本の特徴ともいふべき）人工給餌にたよっている鳥を相手にするなら確認率は少々低下するであろうがネックバンドの装着は可成く早期に打切ることが提言したい。

（〒099—36 北海道斜里郡小清水町8区）

## 定時定点調査の集計作業を了えて 玉 田 誠

Finishing Aggregation Works of Monthly Swam Counts: Makoto Tamada

白鳥の定時定点調査は会則の条文にこそ明記はされていないが、本会の発足以来継続してきた最大の事業といってよいと思う。しかしすでに大森副会長が指摘されたように集計表の空欄は年毎に増加する傾向が見られるのは遺憾である。集約状況一覧表は本1981年期の報告についての総まとめで、この様な形での提示には問題もあろうが現況を把握していただくために敢えて発表するこ